八巻芳夫（やまき　よしお）

板橋　元一
（元仙台市建設局次長）

明治32年11月，宮城県丸森町に生まれ，大正13年３月に旧制仙台高等工業学校土木工学科を卒業，直ちに朝鮮総督府に就職，終戦による引揚後，昭和21年５月請われて仙台市の戦災復興事業に携わる。初め工営課長として，のち復興部長，建設局長，建設局技監の要職をつとめ昭和41年退職，以後建設会社を設立し経営に当たられた。

市を退いたのちも仙台市都市計画審議会委員，杜の都の環境をつくる審議会委員等に就かれ仙台市の建設，開発行政に積極的に参画され大きな足跡をのこされた。八巻がかかわった仕事の一端を記し業績を振り返ってみたい。

戦災復興事業は，仙台市が戦前の城下町から近代的都市に新生するための基礎づくりであった。戦災をうけた中心市街地，面積291ha，権利者5,000人を越し，30年という長い期間をかけての大事業であった。公共施設計画をみると，市内に飛行機の滑走路をつくるためかといわれるほどの思い切った広巾員の街路計画をはじめ，公園についても，従前は１ヶ所32,000㎡しかなかったが，15ケ所，205,000㎡にし面目を一新した。新しい施設も盛り込まれ，学校４校の地区外への移転，４つの社寺の墓地を新霊園へ移す等実施された。一般宅地の平均減歩率は25％で土地区画整理への理解も高くなかったため，事業の展開も困難の連続だった。八巻さんはよきリーダーシップを発揮され，市民には誠実な対応をもって一つ一つ問題を解決していった。関係者の一致する評価である。

この事業の中で特に記したいことは，緑化計画である。八巻さんは朝鮮総督府時代に緑のすくなかった地域を地方道の並木で潤すという事業を，「自ら狂気と思われる熱意で実践した」と著書で記しているが，これを仙台市の焼野原の復興にかける。仙台は戦前から杜の都と称され緑の多い都市として知られ市民の誇りでもあった。即ち市街地は山と社寺の森にかこまれ，一般の宅地には，木を植えるという古くからの慣習があって落ちついた町を作っていた。しかし戦災のため宅地内の木は失われ，区画整理の減歩のため屋敷内に木を植える余裕がなくなった。八巻さんは街路樹と公園に植樹することで杜の都の再生をはかった。青葉通り，定禅寺通りの「けやき並木」は，いま仙台市の象徴として余りにも有名である。復興事業により整備された街路の歩道にはすべて植樹した。延長30kmに７千本が，市民に街にすばらしい景観と潤いを与えている。また幹線街路と繁華街の６路線延長約６kmは電力線，電話線を地下へ，あるいは表通りへ移し樹木はのびのびと繁りその姿を誇っている。街路樹を刺身のツマ的な存在から主役に立たせ，道路にも町の緑化の役割を与えた。この成果は全市的な緑化運動を起こし，市においても「杜の都の環境をつくる条例」を制定し緑の創出と保存緑地，保存樹木の指定など，緑地政策に力を入れることになった。

復興事業が一段落ついた昭和34年，非戦災地区で仙台駅東側の都市改造事業に着手する。所請駅裏地区として古い低層の家屋が並び，伊達藩時代から33ヶ寺も伽藍が並ぶ寺町で取り残された地区であった。しかし仙台市としては将来東部発展の核として開発が急がれていた地区であり，復興事業で育った豊富な人材をもって，困難な既成市街地の再生を計ることにした。八巻さんはまず墓地の全面移転の計画を立て，市街地から西方約６kmの旧宮城町（現在仙台市へ合併）に霊園を造成することにし，その規模も市民墓地を併置して100haとした。墓地の移転は市と寺との間に墓の所有権確認の訴訟があり成らなかった。いまは葛岡墓園として，都市改造事業による移転墓地と一般市民墓地の霊魂の諍地として利用されている。

墓地問題が起こると，当時の市長島野武氏は八巻さんを技監として就任を要請し，寺との折衝を委された。33ヶ寺をふくむ市内109ヶ寺について訴訟上の和解が成立し，事業も一挙に進み第一期60ha，第２期56haを完了し従来の裏町イメージはかえられ，市の中心市街地に生れ変った。関連事業としてＪＲ仙石線の地下化がすすめられ，地区の一層の活性が期待されるところである。

仙台市が近代都市に脱皮する大切な時期に，八巻さんという人材を迎え街づくりを進めることができたことは，仙台市にとっても幸いではなかったと思われてなりません。平成２年10月，満90才で逝かれました。誠に哀悼に堪えません。